

H25 年度 JICA 地球ひろば教師海外研修
海外研修報告書

研修国	ブータン		
氏名	田中隆志	担当教科	地歴科
学校名	群馬県立桐生女子高等学校	学年	1, 2 学年

1. 海外研修における、ご自身の目的やねらいは何でしたか？

(1) 国際ボランティアにおける「相互支援」について考える

まず私が、この研修を通して考えたかったのは、国際ボランティアの支援国(ドナー)である日本と、支援対象国とのあるべき関係を考えたいということでした。国際支援は、「持てる先進国」が「持たざる発展途上国」に与えるというスタンスで行っていただけでは、先進国の自己満足に終わるだけです。双方の国益になりません。したがって、私は訪問先の国(ブータン)がかかえる様々な課題に対し、日本に何ができるのか。反対に、私たちの国、日本が訪問先となった国(ブータン)から何が学べるのか、それを今回のブータンへの渡航のねらいと考えていました。「相互支援」を考えたかったのです。

(2) 地歴科の授業で活用できる素材を収集する

また今回の訪問先となったブータンについては、事前の資料検索により、特徴的な地理環境および歴史環境をもつ国であることを知りました。そのため、「地歴科の授業で活用できる素材(写真、地図など)をたくさん収集していきたい」と考えました。つまりブータンは高山気候という特徴的な気候をもつ地域であり、また中華人民共和国とインドという二大国に挟まれながらも独立を保ってきた政治的緩衝国でもあります。とくに地理や世界史の教材として取り上げる上で大変興味深い国という認識で、関連資料を集めてきたいと考えていました。

2. 研修国では何を学ぶことができましたか？(経験、資料、印象に残った言葉など)

今回の研修を通して、私が一番強く感じたのは、「現地に足を運ばなければ、良い面も悪い面も、その背景も見えてこないのだ」という至極当然のことでした。私は、以下の(1)のように自分なりの方針を立て、今回の研修に臨みましたが、その結果、そうした認識を再確認するに至りました。(2)以下は得たものというよりは研修をとおして見たこと、感じたこと、考えたことのまとめです。

(1) 研修に臨む上での方針

渡航前、私は訪問国であるブータンに関して様々なサイトや本を検索しましたが、入手できる情報のほとんどが、「GNH(国民総幸福量)の政策によって国民の大部分が幸せと言っている『幸せの国』』というイメージのものばかりでした。貧困問題、難民問題や都市問題、インドと中華人民共和国という大国との難しい関係について触れているものはわずかでした。ただ私は、「貧しいけれど無邪気に笑って頑張っている発展途上国の人々」という一面的なイメージだけでその国に行くことは、相手の国にもすごく「失礼なことだ」と考えていました。ですから研修に臨むのにあたっては、「最初からブータンは幸せの国だ」という結論ありきで、この国をみていくのはやめよう。自分の目でみて、客観的に評価しようと考え、臨みました。

(2) 無垢な国ブータンを見ました

それで実際に私が見て、感じてきたブータンですが、ブータンには確かに、「マスコミ」で言われているような、今の日本では次第に見られなくなってきた、人心の純朴さ、無垢さ、お年寄りや他者を思いやる気持ち、美しい自然環境があったように思います。またチベット仏教への厚い信仰心や、民族衣装や、母語など伝統文化を非常に大事にしている点も各所で見ることができました。とくに「人心の純朴・無垢さ」という点に関しては、訪問先の小中学校での、授業に取り組む子供の真剣なまなざしが忘れられません。またホームステイ先でいったピクニックの帰り雨が降ってきてしまったところで、お孫さんが足の弱った祖母の手を引いて山をくだっていった時の姿にも感動しました。また研修中は、教育省をはじめ、3つの小中学校、王立の教育大学、病院、タンゴ僧院などを見学させていただきましたが、国王が掲げた「GNH」という政策ビジョンが、「思想」として、あらゆる分野で浸透していることを知り、政府が国民にビジョンを示している「まとまりのある国」という印象をもちました。今の日本人や日本という国が「忘れてしまったり、失ってしまったり」、ふたたび「学ばなければ

H25 年度 JICA 地球ひろば教師海外研修 海外研修報告書

ばいけない」ものがたくさんあるように思いました。



写真1 パロの自然景観



写真2 ディチェンチョリン小中学校の授業風景(ティンプー)



写真3 ピクニック帰りの祖母と孫(パロ)



写真4 クズチェン小中学校での放課後のお祈り(ティンプー)

(3)課題も感じました

ただ現実には、車窓から町の様子を見たり、3つの小中学校に足を踏み入れて生徒や先生方の肉声に触れたり、青年海外協力隊の隊員やホームステイ先の方々に様々な話を聞く中で、ブータンの抱える「様々な課題」を知ることができました。

今回、私たちが研修で回ったのは、比較的豊かで治安が安定している西部の、主要民族・ゾンカの人々が暮らす地域でした。しかし、研修中まわったそうした地域に限定しても、農村部と都市部とでは、経済的豊かさ、人々の暮らし、衛生環境、人間性といった点で「大きな開き」がある印象を受けました。さらに今回行けなかった地域には、「貧困率が高く、難民の問題をかえる南部」と「貧困率が高い農村地域の東部」があるのだということも知りました。そして民族構成では、ゾンカの人以外で、インド系、ネパール系、チベット系など複数の民族が暮らしていることを知りました。

また国が打ち出す「GNH」というビジョンに向かって、各分野の人々が努力をされていることは感じたものの、各分野でのスキーム(枠組みをもった計画)が明確にあるわけではなく、現場の方々がだいぶご苦労されているなという印象も持ちました。

①地域格差への対応

ブータンは「経済的豊かさよりも幸せを優先」というGNHのビジョンのもとで、各分野の人々が努力しています。しかし私自身は正直、農村地域については、「足るを知る思想」によって「幸せを感じなさい」という以前に、貧困解消のほうがか急務なのではないかとの実感を持ちました。たとえば今回の研修では、「都市郊外にあるティンプーの小中学校」と、「農村地域にあるガセロ小中学校」の両方の昼食風景を見させていただきましたが、そのギャップに正直驚きました。前者はランチボックスで自宅からお弁当を持ってきている子供たちが多いのに対して、後者は近隣の有志の人たちが作ってくれた給食を食べていました。しかもそれは、ほんとうにまれにあるご馳走で、普段は「WFPの学校給食プログラム」による、質素な給食を食べている子供たちが大勢いるのだという話でした。

またパロの病院を訪問した際、私はICUの室内を見学させていただいたり、救急医療体制についての話を青年海外協力隊の隊員から伺いました。ブータンでは、旅行で滞在している外国人を含めて医療費は無料という体制になっているとの話だったので、その点は私も、社会保障制度の在り方として素晴らしいと考えました。しかし、農村部の救急患者に

H25 年度 JICA 地球ひろば教師海外研修 海外研修報告書

関しては、救急車到達時間がかかるため、生存率が低くなるとの話を聞きました。通常の通院も農村地域では、道路事情が悪く難しいケースも多いとの話も伺いました。医療における地域格差を解消することも、「幸せ」の国にとって緊急の課題であると考えました。



写真 5 ディチェンチョリン小中学校の昼食風景
(ティンパー郊外)



写真 6 ガゼロ小中学校の給食の配給
(ワンディポタン郊外)

②多様な民族構成への対応

ブータン政府は現在、伝統文化を守るための文化的同一化政策(ゾンカ語教育、公的場面での民族衣装の着用)を行っています。そうした中で、かつてそれに承服しなかったネパール系住民が大挙して難民として国外流出したことを、国連や世界銀行などから非難されています。また政府は、数年前に南部で民主化をもとめてネパール系の人々が起こした暴動鎮圧に対しても、大きな労力を費やされました。そうした背景からなのか、研修中、各所でネパール系の人々が心無いことを言われるなど不利益を受けているとの話を聞きました。実際、訪問先の学校で授業見学をさせていただいたときも、教師が勉強が分からないネパール系の女の子に、「あなたが勉強できないのは、あなたの両親が教育をうけてこなかった責任だ」と他の生徒たちが見ている前で叱っていました。私は伝統文化を守っていこうという姿勢はすばらしいと考えています。ただ多様な民族構成からなる現実を考えると、それをすべての国民に対して徹底し、それを受け入れられない民族を排斥していくことは時代と逆行していることであると考えました。

一方、現代化を背景に、道路や橋梁、住宅建設などがラッシュをむかえているブータンでは今や、インドからたくさんの建設労働者が流れ込んできています。そうした中で、もともと肉体労働のような仕事を「賤しい仕事」という職業観をもってきたブータン人は、そうしたインド人とは交わらないのだとも聞きました。それだけでなく研修中、「勉強しないとああいいう(インド人のような)仕事にしかつけないぞと生徒に焚き付けている教師がいるらしい」との話も聞きました。インド人に対して反感をもつ人々が大勢いるとの話もききました。ただ一方で、首都・ティンパーには、川ぞいなどにバラックで作られたインド人労働者のスラムが形成され、「無秩序な都市化」の一因ともなっています。私はこうした自分たちと関係が深くなってきている外国人とのかかわり方にも、正直課題を感じました。

ブータンは現在、中華人民共和国とインドとの間に挟まれている緩衝国で、歴史的に国内の民族問題を口実に、領土を侵食されてきた歴史をもっています。そうした中で、純血性をたかめる文化政策を実施しないと、大国に飲み込まれる危険があります。状況を考えると、多民族社会であることを前提にした「幸せ」を認めたら、国家が消滅するかもという政治判断もあるのかもしれませんが、しかしそれは21世紀の国際社会では容認されない考えであると思います。個人的には、国連などの協力を取り付ける中で、多民族に開かれた「幸せ」を模索するしかないのではないかと考えました。



写真 7 建設現場で働くインド人労働者(パロ)

H25 年度 JICA 地球ひろば教師海外研修 海外研修報告書

③拙速な現代化への対応

研修でブータンを訪れている最中、私はあるニュースをブータンの方から聞いて、ブータン政府は GNH というビジョンを本当に「本気」で考えているのだなということを実感しました。それは、「国内で自動車が増えすぎて、渋滞問題などの弊害もでてきたからしばらく自動車の輸入を禁止しよう」という政策を国が実施しているとのニュースです。ただし同時に、首都・ティンブー市のゴミ問題や無秩序な住宅建設を目の当たりにして、「自動車の禁輸措置」だけでは GNH でうたう環境保護にはならないのではとも感じました。つまり GNH というビジョンはあるものの、政策実行する上での具体的な計画(スキーム)が明確化していない印象を受けました。おそらく、ブータン政府が考えていた以上のスピードで現代化が進行しているために、対応しきれないということなのではとも考えました。

見学したメラカゴミ処理場では、ティンブー市とその周辺から集まったゴミが集積されますが、現状では谷にゴミを埋設していく単純な方式でゴミ処理をはかっています。近年の都市化によってティンブー市のゴミ排出量は急増していますが、数年でゴミ処理場の許容限度を超えてしまいます。その抜本的な対策がとられていないのが現状でした。

またティンブー市をはじめブータン各地では、住宅建設がラッシュを迎えています。パロなどでは、それによって土地生産性が高かった棚田が減ってきているとの話も伺いました。



写真 8 メメラカゴミ処分場(ティンブー郊外)



写真 9 建設ラッシュ(ティンブー市内)

さらに今、ブータンでは「現代化に向けて、優秀な人材を育てていこう」ということで、教育に力を入れています。訪問した小中学校ではどの学校でも、1年生から、国語のゾンカ語の授業を除いて、すべての科目が英語で行われていました。学校を訪問した際に生徒がつけている教科書の内容を見ましたが、かなりレベルの高い教科書を使っていました。授業で発言している、生徒の、豊かな語彙力には驚かされました。低学年の段階からディベート学習を取り入れた授業を導入しているとの話も伺いました。しかし訪問中、ある方から、大変意外なことを二つ聞きました。一つは上級学年では、落第者もかなりでるのだという話でした。またもう一つは、生徒の学校卒業後の「職業」が、在学中の成績と直結する社会システムがこの国にはあるのだということです。教室では生徒は真剣なまなざしで授業を受けています。ただその背景には、学校の成績で、職業がほとんど決まる徹底した学歴社会があったのだということを知りました。急速にすすむ現代化への対応として、こうした柔軟性のない学歴社会にしてしまうことは、この国の「幸せ」にとってどんな意味があるのだろうかと考えました。

H25 年度 JICA 地球ひろば教師海外研修 海外研修報告書

3. 児童/生徒に一番伝えたいこと、考えてもらいたいことは何ですか？

「現地に足を運ばなければ、良い面も悪い面も、その背景も見えてこないのだ」という点です。また発展途上国の現代化の中での、苦悩や課題を生徒に考えさせたいと思います。

4. 海外研修全般に関する所感

今回は個人旅行ではできない数々の経験や、現地の方からの対面取材を通して、密度の濃い情報収集ができました。こうした研修に参加させていただいたことや、この研修を国内外で支えてくださったJICAスタッフには大変感謝しております。

5. 今後の本研修参加者へのアドバイス

個々の参加者の目指すもの、校種によっても、得たい情報、知りたい情報は違うと思います。現地での取材の際は、積極的に「自分が欲しい情報」をとりに行くようにしてください。

6. 特に印象に残った訪問先や体験をした先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	体験と所感
<p>王立病院</p> 	<p>集中治療室 (ICU) での高い致死率や農村部への救急車到達時間の長さなど救急医療体制が確立していない点。透析室の衛生管理の水準が低いことなどが日本の病院施設と大きくことなっていたため、ショックでした。</p>
<p>メラカゴミ処分場</p> 	<p>人口急増によって、ティンブー郊外のメラカゴミ処分場のゴミ処理能力が限界に近づいているとの話や、ゴミ処分場から出てくる廃液が下流にある小川に合流しているのではないかとの話、施設のプラントがバラバラで、かなりの部分を手作業で運営されていることなどにショックを受けました。</p>
<p>ガセロ小中学校</p> 	<p>校長先生が「地理」の先生をされていて、私が授業参観の時に私が食い入るように生徒の地理の教科書を見ていたのを覚えていてくれて、最後、学校を離れるときに、7年生と8年生の地理の教科書を手渡してくださったことです。また雨が降りしきる中、メンバーでソーラン節を踊った時に、すべての生徒が最後まで見てくれていたことが印象的でした。地震で一部のクラスはテントを使って授業をしていたり、貧困を背景としてWFPの給食プログラムを受け入れているなど様々な課題を抱える「農村の学校」でしたが、人心の無垢さを感じました。</p>